

# 我々意識の変動と方位

## A STUDY ON THE CHANGE OF WE- CONSCIOUSNESS AND DIRECTION

博士後期課程 政治学専攻51入学

斗 鬼 正 一

MASAKAZU TOKI

### はじめに

筆者は先に、新潟県中魚沼郡津南町における方位と結びついた道を取り上げ、道およびそこを移動する人、物が我々意識を明示、固定する機能を与えられている事を示した。更に埼玉県比企郡川島町に於ては、方位が同様の機能を与えられている事を示した。しかし津南町は過疎地帯で変動に乏しく、地形的にも河岸段丘で豪雪地帯である為、空間的制約が大変大きく、我々意識との関連も必然性の部分が多かった、川島町も東京近郊といってもまだ全くの農村で、地形的には完全に平坦ではあるが、周囲を大河で囲まれ、これまた我々意識は必然性の部分が多いと言える。両者共に、いわば大変安定した我々意識を固定する事こそ、方位や人、物の移動に与えられた機能であった訳である。これに対し神奈川県足柄上郡中井町は、地形的には、北、東、西を山で囲まれてはいるが、丘という程度で、道路も多数通じ、我々意識の面でも、元々周辺地域と大変関わりが深かった。加えて行政区画の変動や、大都市通勤圏として開発の波をかぶり、我々意識上の変動が大変大きい。こうした地域において、方位とそれに統制された人、物の空間的移動がどんな機能を与えられているかを検討していこうというのである。

中井町は東海道線二宮駅（中郡二宮町）、国府津駅（小田原市）、小田急線大秦野駅（秦野市）からバスで約30分、県西部の内陸地帯にある。周囲は小田原、平塚、秦野市、二宮町、足柄上郡大井町に囲まれ、面積19.75km<sup>2</sup>、東西6.8km、南北5.3km、2,386世帯、人口9,201人、人口密度466人という県内では大変に小さな町である。人口動態、耕地面積等は表1、2に示した通りだが、農業はみかん、酪農、畑作中心の兼業農家が殆んどで、田は少ない。また東名高速道路のインター開設や、東海道線の複々線化等で工場や新住民が増え、人口は急激に増加している。

### I 我々意識の特徴と変動

#### 1. 中井と周辺の市町

中井の地形は複雑で、周囲は南以外山で囲まれ、谷戸が入り組んでいる。しかし各谷戸とも、大

図1

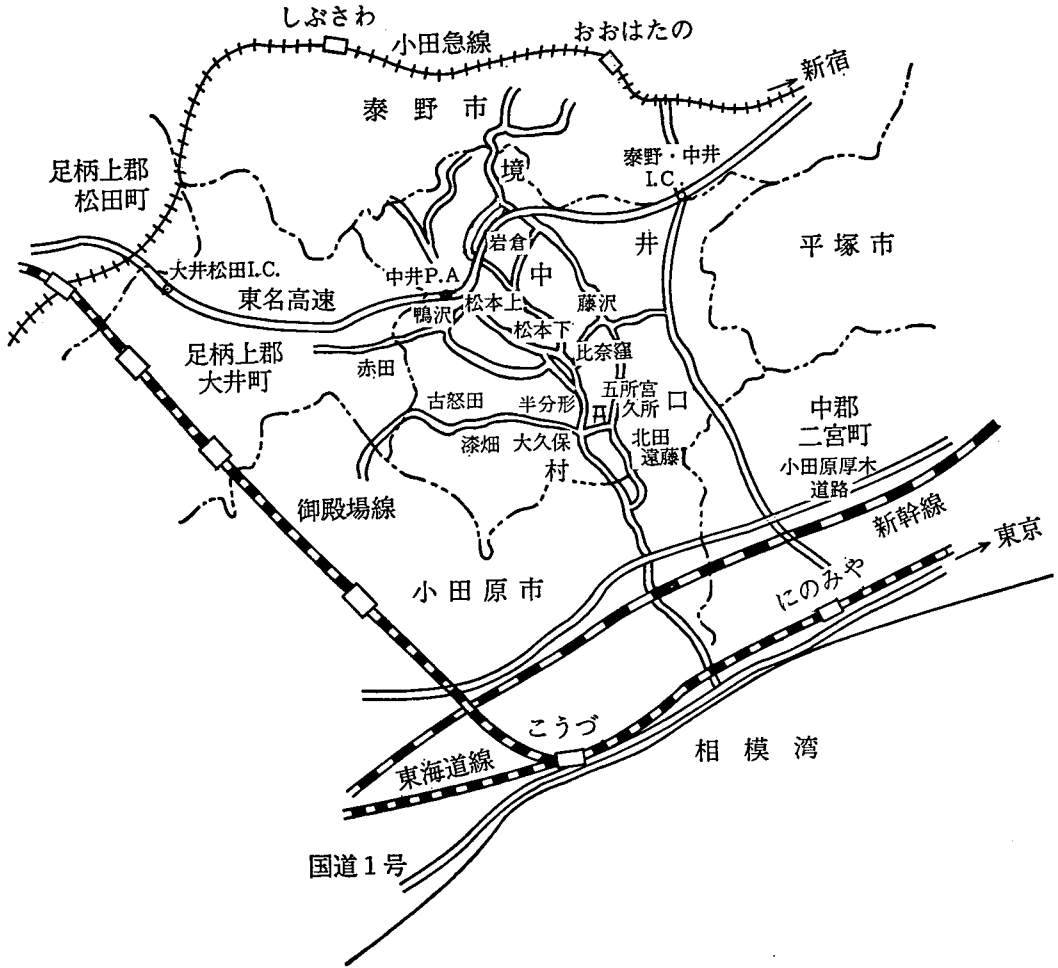


表1 人口・世帯数の推移

□ 世帯数 ■ 男 ■ 女 (各年10月1日現在)

年	世帯数	男	女
昭和52年	1,721戸	3,969人	3,877人
昭和53年	1,994戸	4,209人	4,023人
昭和54年	2,068戸	4,323人	4,104人
昭和55年	2,134戸	4,414人	4,212人
昭和56年	2,208戸	4,530人	4,333人
昭和57年	2,271戸	4,625人	4,359人

表 2

## ●地目別土地面積の推移

年	宅 地		田		畑		山 林		そ の 他		合 計	
	面積 (ha)	構成比 (%)	面積 (ha)	構成比 (%)	面積 (ha)	構成比 (%)	面積 (ha)	構成比 (%)	面積 (ha)	構成比 (%)	面積 (ha)	構成比 (%)
52	145.2	7.3	70.7	3.6	634.2	32.1	767.5	38.9	357.4	18.1	1,975	100
53	148.9	7.5	68.0	3.4	632.5	32.0	759.4	38.5	366.2	18.6	1,975	100
54	154.2	7.8	66.1	3.3	625.4	31.7	764.9	38.7	364.4	18.5	1,975	100
55	156.6	7.9	64.0	3.2	632.4	32.0	765.3	38.8	356.7	18.1	1,975	100
56	159.1	8.1	63.4	3.2	638.8	32.3	762.8	38.6	350.9	17.8	1,975	100

資料：固定資産税概要調書（各年1月1日現在）

## ●専・兼業別農家数の推移

(単位：戸)

年	専 業 農 家	第 一 種 兼 業	第 二 種 兼 業	総 数	農 家 人 口
50	85	240	315	640	3,580人
55	76	155	355	586	3,124

資料：農業センサス（各年2月1日現在）

## ●経営耕地面積

(単位 農家数：戸 面積：a)

年	総 経 営 耕 地 面 積	田		畑		樹 園 地	
		田のある 農 家 数	面 積	畑のある 農 家 数	面 積	樹園地の ある農家数	面 積
50	58,082	322	4,866	587	26,331	471	26,885
55	52,984	270	3,981	527	23,876	457	25,127

資料：農業センサス（各年2月1日現在）

井、松田町、秦野、平塚市等の市街地に続いており、歴史的にもこれらの地域との関係が深かった。中井は、大井、松田と同じ足柄上郡で、今日でも北西端の鴨沢部落と大井の赤田部落が「隣り部落」としてつきあっているといった例がある。小田原、二宮との間には山もなく、元々行き来は大変盛んだったし、秦野とも煙草の出荷等で経済的結びつきが強かった。こうした中で、中井が成立したのは明治になってからで、それまで中井という単位は、存在しなかったのである。

## 2. 中村と井の口

旧幕時代、井の口は御料から石野家領に変わったものの、単一の領地であった。一方中村地区は、各大字が、鴨沢、古怒田が大久保忠直、雑色が大久保忠頭、松本が御料、比奈窪、藤沢、半分形は兵部少輔信彦、遠藤が小野原信吉、境が伏屋新助というように別の領主の支配下にあった。明治に入り1879（明治12）年中村と井の口村が成立、1884（明治17）年には比奈窪、松本、岩倉、雑色、鴨沢、古怒田、半分形、田中、遠藤、北田、久所、藤沢、境、北別所、そして井の口が連合して比奈窪役場を設立した。しかし1889（明治22）年には町村制施行により中村、井の口村が分離、1908（明治41）

年に再度合併して、双方の頭文字をとり中井村となったのである。町制施行は1958（昭和33）年である。

こうした経過から、中井の行政区分は、まず旧中村と旧井の口村に2大別され、更に中村上、下地区、井の口上、下地区に4分される。この両地区は発展にも大きな差があり、井の口には明治から昭和初期まで軽便鉄道が走り、近年もバス便が良い上、市街化区域が多いので人口増が激しい。我々意識上の対抗意識もこんな所から生まれ、特に選挙では町を2分してしまった事もあったという。しかし合併も古く、行き来も盛んで、いわば対立と連帯が併存して1つの中井町となっているといつてよい。

以上を要するに、中井自体が元々明白に我々意識上の単位であった訳ではなく、後に行政区画として設定されたものであり、合併後は中村と、井の口の対抗関係が生じて来た事等、かなり変動が激しい事が注目される。

### 3. 中村内部の複雑性

中村の我々意識の特徴は、地元の人々ですらうまく説明できない程の複雑さと変動である。

#### 1) 大久保の歴史

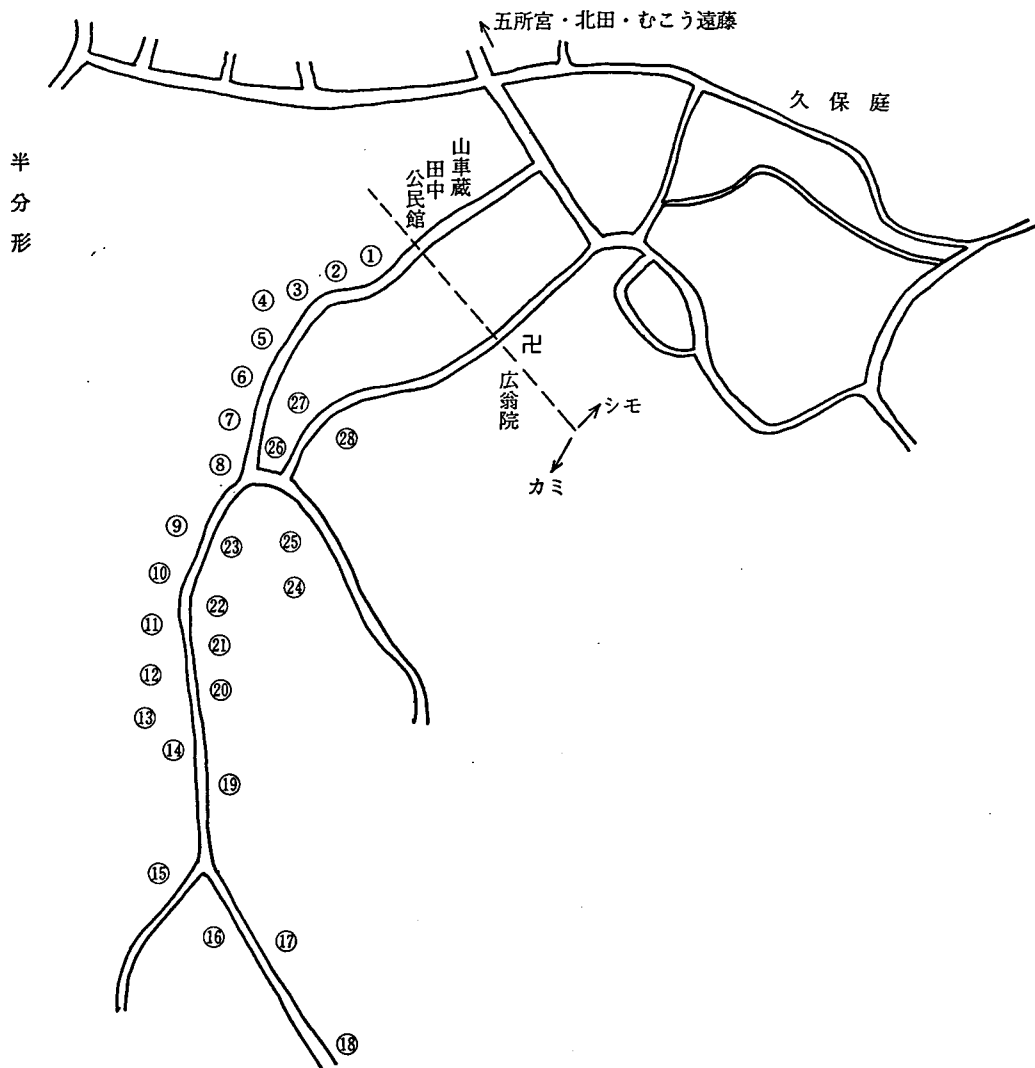
中村下地区では、1980年4月1日、五所の宮部落と共に大久保部落が誕生した。このうち五所の宮は新設であるが、大久保は「中ば存在していた部落」が後追い公認の形で設立された部落である。大久保は本来田中部落の人々が居住する地区であった。しかし地籍の上では遠藤、北田部落の土地が多数点在しており、やがて遠藤、北田の人々が分家を出したり、移転して来る人が増えて来た。そうした場合、旧幕時代は部落毎に領主も違ったので、部落を変更する事はできなかった。明治以後の移住者も、永年親しんだ部落と分かれがたい、本家と一緒にの部落の方が良いといった理由で、本来なら空間的原理から田中部落に入るべき所、そのままとの部落に属している人が多くなって来た。北田は現在4軒だけだが、遠藤は元の遠藤を「むこう遠藤」、田中の中の遠藤を「こっち遠藤」と称する程にまでなった。空間的には単一の部落に、我々意識の上で別々の3部落の人々が居住することになってしまった訳である。

#### 2) 大久保の我々意識

図2の①～③と⑧は北田、④～⑦は遠藤、⑯と⑨～⑫、⑮⑯は田中、⑬⑭と⑰～⑳は遠藤、㉑～㉒は田中、㉓は遠藤の所属であった。行政上は当然別々の部落であったから、田中は田中だけ、遠藤は「むこう遠藤」と一緒に、北田も本来の北田と一緒に各々区長を選んで来た。組も各部落別で、①～③と⑧は北田の中の1つの組、④～⑦は遠藤の中の1つの組、といった具合に別々で、五長（組の長）も別々に選出していた。

非日常的出来事では、結婚式、葬式等でも組の人々がまず第1に協力する。これを指揮するのがジエン（地縁または持縁）である。ジエンは通例隣接した同士の2軒の関係で、元々は本分家が多いというが、今日では、殆んどが関係はわからなくなっている。ジエンは当然同じ部落同仕で、例えば㉑と

図2 大久保



③、⑥と⑦、①と⑧がジエンである。こうしてたとえ隣りでも、部落が違えば、特別な手伝いには行かないのである。

この他では、通例稲荷は各屋敷にあって、火の用心、鬼門を守る等といって各戸で祭られているのだが、北田の①～③と⑧が毎年2月ハツウマの日に①の屋敷内にある稲荷を共同で祭り、飲食する稲荷講の例も注目される。

こうした元の部落への執着から時にまったく極端な例も生じる。現在大久保の西端に住んでいる家は、元々大久保から歩いたら1時間以上もかかる、現在3軒だけの孤立した部落<sup>うるしばた</sup>漆畑に住んでいたが、通勤、通学に不便な為大久保に移って来た。しかし移転後も組は漆畑に属し、何かあるたびに

出かけていく。逆にもと大久保で、現在漆畑に住んでいるある家は、あいかわらず大久保に属し、やはり事ある毎に出てくるという。

しかし、現実の問題として「3代も住んでれば情が通じ」、部落が違うといっても日常生活では違いが表に出るようなことはなくなってくる。こうしてより現実的な、空間と対応した「庭」という組織が作られてきた。庭は葬式の際棺を運んだり、穴を掘ったりするのだが、この分け方は、㉓と㉑～㉒、㉓、㉔は田中分の庭、㉑㉒㉓～㉔は遠藤分の庭、そして㉕～㉖は田中でも出口という小字名なので出口庭と呼ばれた。注目されるのは㉑～㉔が北田分、遠藤分合同で仲の庭となっている点である。

また行政上でも、道普請、川普請、街灯の保守といった場合は当然大久保で協力しなければならず、庭を単位としたり、大久保を単位としたりして協力が行なわれた。こうした経費は、割合が定められ、田中が6割、遠藤が4割を支払った。こうした場合のまとめは田中の区長であり、また北田の人は戸数が少ないので、田中分として計算された。また部落の総会は、大久保地域全員の集会和、田中、遠藤、北田別々の総会があり、人々は2回総会に出席した訳である。集会所は、「田中公民館」で、大久保全員の集会、田中の集会の他「むこう」「こっち」をあわせた遠藤の集会も行なわれた。北田の人々は元の北田の公民館である。

### 3) 行政区画改編問題

中井でも最も二宮、小田原に近い大久保周辺は、地形的にも山砂利採取で山がいくつも姿を消し、

表3

町の将来を考えた時、あなたは現在の行政区画をどうしたらよいと思いますか。		あなたは行政区画を変更した場合、どのような支障があると思いますか。次の中からあなたのお考えに近いものを選んで下さい。	
1. 変えたほうがよい	60.2%	1. 今までの部落意識と違ってくると思われるので和合がむずかしい	33.0%
2. 変えないほうがよい	17.4	2. 新しい住宅だけの部落ができた場合その運営がむずかしいと思う	17.0
3. どちらでもよい	11.5	3. 集会施設がないので困る	8.2
4. わからない	8.2	4. その他	5.6
5. 無 答	2.7	5. 無 答	36.2
	計 100.0		計 100.0
行政区画を変えないほうがよいと答えられた方は、その理由を次の中からあなたのお考えに近いものを選んで下さい。		あなたは、行政区画を変更する場合、隣組の問題についてどう考えますか。	
	(%) 全体の		
1. 現在の区域で別段支障がないから	57.9(10.1)	1. 行政区画が決まってから、その区域内で協議し決めたほうがよい。	73.2
2. 部落内の付き合いが古く、今更新しい区域に入りたくないから	13.2( 2.3)	2. 行政区画が変更になっても、従前の隣組は変えたくない	13.3
3. 部落にはそれぞれにいい習慣があり、次の世代にも引き継ぎたいから	11.9( 2.1)	3. どちらでもよい	7.1
4. 理由はないが変りたくないから	9.2( 1.6)	4. わからない	3.2
5. その他	0.6( 0.1)	5. 無 答	3.2
6. 無 答	7.2( 1.2)		
	計100.0(17.4)		計 100.0

加えて市街化区域に指定されたため、工場が進出、更に新住民が多数移り住んできた。新住民も、たまたま自分の宅地の地籍が遠藤なら遠藤、田中なら田中に所属する訳であるが、もともと新住民の多くは地方出身者で、京浜方面に通うサラリーマンが多く、部落の所属などあまり関係のない人々である。こうして大久保はますます様々の我々意識を持った人々が集まり、混乱を深める事となったのである。こうして1978年、改編問題が持ち上がったのである。発議は区長会及び町議会であったが、作業は町当局を中心に区長、町議等で研究委員会を設置、町民へのアンケートでも6割方の支持を得て推進された。しかし表3に示したように、変えない方が良いが17.4%、飛地の整理だけにとどめるが38.7%もあり、変えた場合、様々の問題が心配され、名称も残したいという意見も多かった。更に区域が変更になっても隣組は変えたくないが13.3%もある、といった具合で作業は難行、ようやく地元話し合いを経て、1980年、従来の田中、「こっち遠藤」、それに北田の4軒、そして新住民を加えて正式に、空間的、社会的距離の一致した、大久保部落が成立したのである。

#### 4) 寄せ宮

中村の人々の我々意識の構造を大きく変化させ、増々複雑さを増したのが五所宮八幡宮への中村内小神社の合社、いわゆる寄せ宮である。

五所宮は地元の説明によれば、宇佐八幡、石清水八幡、鶴岡八幡、そして埼玉の大崎八幡と共に日本五大八幡の1つとされるお宮で、東西南北即ち下井ノ口、赤田、酒匂<sup>さかほ</sup>(小田原市)、秦野の4つの八幡宮を守り神とし、それ故五所宮とされたという。その為祭り等に於ても中村を中心に、各八幡宮の部落が協力し、我々意識の面でも大変広範な地域との連帯が広がっていたのである。しかしその後これらの八幡宮は五所宮の祭りに参加しなくなり、五所宮周辺の部落だけで行なわれるようになっていった。それ故中村の各部落では、独自の氏神を持ち、祭りも田中は田中、遠藤は遠藤と各々別々に行っていた訳である。ところが1908～9(明治41～2)年に、「負担軽減と資力を豊かにし、(五所宮の)祭典を厳粛にすることの上意」<sup>2)</sup>により各神社が五所宮に合社されたのである。この時「ミタマは五所宮に移り」、各神社の宝物等も五所宮に移された。その後各神社は朽ちてしまったものも多く、かつての祭典の日に灯明をあげている鴨沢等は例外的である。

これを契機に、五所宮の祭典は中村の全部落が協力して行なう事となり、各部落の役割が決定された。この場合の部落というのがまた複雑で、それ以前は別々だった田中と「こっち遠藤」、北田の4軒の人々はこれ以後「大久保部落」として祭りに参加する事になり、山車の維持、管理等も一部落として取り組む事になったのである。寄せ宮というお上の意向によって、祭りの時のみ機能する「部落」が今1つかぶさって来た訳である。これと同様な例は、「むこう遠藤」、北田、そして久所の3部落の人々が祭りの時だけ協力する「宮本部落」にも見られる。この影響で設定されたのが大久保消防団と宮本消防団で、これにより大久保は公的組織の面でも1つの部落としての機能を1つ加えた訳である。消防団はその後1950(昭和25)年までは宮本が第1部、大久保が第2部、半分形が第3部等と部制が続いたが、1950年以後、機械化による改編が行なわれ、中村下地区と古怒田が第1分団、井の口が第2分団、中村上の5部落が第3分団、そして境だけが第4分団となった。

以上を要するに、中井の人々の我々意識の特徴は、変動の激しさと重層性という事になろう。つまりかつての広範な地域との連帯、中井の成立、中井内部での井の口と中村の対抗、更に寄せ宮による祭祀上の「部落」や後述の上6ヶ村・下6ヶ村の成立、そして新住民の流入等による部落改編といった激しさと、いつまでも元々の我々意識に固執する事からくる、1つの地域に重なるいくつもの部落や諸集団の重層化とである。

これを他方空間という面から考えるならば、現実に存在する物理的距離を無視して、旧来の我々意識に固執しつつ、同時に空間的近さのもたらす新たな我々意識もまた形成され、重層的構造となっている、という事になろう。

### 5) 生業と我々意識の構造

こうした我々意識の構造は、中井の人々の生業とも深く関連していると考えられる。即ち中井の人々の生業は、まず昔から兼業農家が多かった上、農業といっても乳牛等の酪農、野菜、みかんが中心であり、田は大変少ない。このことは共同労働を殆んど必要としないことを意味し、本分家等でも他部落に行ってしまったら即つきあいが薄くなる、協力ができなくなる、という事にはならないという事である。更に水利も、物理的に近い同士の連帯を不可欠にする要素だが、これまた田が少ない上に陸稲が多く、しかも水はかなり豊富なため、用水の確保に困難など全くなかった。それ故用水路も部落毎、組毎といった設置ではなく、各所に取水口があり、この面での近さの生み出す連帯、逆に遠さによる我々意識の希薄化という事が全くない、という事である。

## Ⅲ 方位と移動

### 1. 方位の設定

#### 1) カミ、シモ、ウエ、シタ

中井に於て使われる方位は、東西南北以外では、カミ、シモ、ウエ、シタ、そして悪い方角として鬼門がある。

〈中村のカミ、シモ〉中村地区の地形は複雑で、中村川を中心に各支流が多くの谷を形成し、比奈窪や五所宮を中心に山の中に入り込んでいる。しかしかつては、中村川本流沿いの、現在の大井町、秦野市方面から中村を経て、現在の小田原市橘地区まで通したカミ、シモの設定があった。しかしその後カミ、シモの範囲は中村内に限定されるようになり、大井方面をカミ、橘地区をシモとはいわなくなった。現在中井町の北西端の地点に「大上<sup>\*\*\*かみ</sup>」というバス停があるが、これも中井の一番端というのでバス会社が勝手につけた名称だという。そして今日最もよく聞かれるのはカミ6ヶ村、シモ6ヶ村という区分で、カミ6ヶ村とは境、鴨沢、古怒田、雑色、松本、比奈窪、下6ヶ村とは、久所、北田、田中、遠藤、藤沢、半分形である。この区分は行政面でも使われるが、もともとは寄せ宮による祭典の変化によるところが大きい。

そこで人々にカミはどちらかと尋ねてみると、たとえばそこが比奈窪ならば「カミは比処だ」という答が返ってくる。逆に大久保で尋ねれば「カミは比奈窪や鴨沢の方」という答である。次に比奈窪



でシモはどちらかを尋ねると、大久保方面だという。ところが大久保で尋ねれば「シモは比処」である。更に比奈窪で北田と遠藤はどちらがシモかときけば北田がシモ、逆に大久保で比奈窪と鴨沢はどちらがカミか尋ねれば鴨沢がカミという答になる。即ちこれは、カミ6ケ村、シモ6ケ村内部ではカミ、シモ方向の距離をカウントせず、カウントするのはカミ6ケ村とシモ6ケ村との境界点を越えた時、そしてその先の各部落を順々にカウントしている、という事である。

〈部落内のカミ、シモ〉部落内のカミ、シモは元々使われていた所と、最近使われるようになった所がある。例えば松本は昔から松本上と松本下にわかれ、松本を通したカミ、シモ軸が設定されている。カミの限界は部落の一番奥で、北西である。シモは比奈窪に接する方向だが、比奈窪をシモとはいわない。岩倉も同様に、谷にそって中村川の支流岩倉川が流れ、上流がカミ、比奈窪方向がシモとされる。川は途中方向を何度か変えるがこれは無視される。

近年になってカミ、シモを使うようになったのは大久保である。もともと田中部落だった時はカミ、シモを使っていたようで、一番五所宮に近い地域を元来はシモニワと呼んでいた。しかし後に久保庭と呼ばれるようになり、シモニワは消滅してしまった。このシモニワ、後の久保庭は現在でも田中の人しか住んでいない「まじりっ気のない庭」である事も注目される。ところが近年、戸数が増加してきたという理由で、中央付近にある寺を境に、入庭、仲庭をカミ、久保庭をシモと分けるようになってきた。それ故久保庭を再度シモニワと呼ぶようになったのである。カミ、シモを使うのは、葬式に出席するか否か、例えば自分がカミならシモの葬式には参加しなくてよい、といった場合で、他には農家だけが加入している生産組合の班、部落で人数を出す時の割りふりに使われている位である。

この他の例では通常他の家を呼ぶ時は、姓または屋号であるが、カミノウチ、シモノウチと呼びあう例もある。これはあくまで同じ組内のシンセキ同仕であり、組が違えば隣接していても使わない。

〈ウエ、シタ〉ウエ、シタは方向を表わすというよりは、地形上の高低差を示す言葉で、隣接した同仕で高低差がある場合にウエノウチ、シタノウチというように使う。カミノウチ、シモノウチとは異なり、シンセキでなくても使われるし、高低差がなければ、地形的に谷の奥、即ちカミの方でもウエノウチとはいわない。

また大久保部落成立後、庭の名称が変更され、出口庭が仲庭に入り、仲庭のシタニワに、元の仲庭が仲庭のウエニワとなり、ウエ、シタの区別のつけられたが、これも土地の高低によるものである。

## 2) 鬼門

表鬼門とはウントラ即ち北々東から東北東、裏鬼門はヒツジサル、即ち南々西から西南西である。中井ではこれと一致している場合もあるが、通例は北が表鬼門、南が裏鬼門とされている。即ち多くの部落でカミが表鬼門、シモが裏鬼門となる。

## 2. 部落間の移動

### 1) 無統制の事例

〈嫁入行列〉嫁入行列の経路に関する唯一の規制は、一部の部落で、石橋があったら、石の組みあ

っているのが拝んでいる形なので通ってはいけないという例がある位であり、各部落を特定の順に結んでいく、という統制が全くない。

〈出征兵士の送迎〉見送りはまず各家で、次いで五所宮で部落主催の御払いをうけた。ここで多くの者は別れ、シンセキ等は村境まで、更に親しいシンセキ、友人等は二宮または国府津駅まで行列して見送った。除隊または遺骨が帰ってくる場合は、村の代表が駅まで、一般の人は中村小学校で出迎えた。いずれの場合も経路の特定がなく、また部落境界での見送りがない点も注目される。

〈山車〉五所宮の祭典の山車は、現在半分形、大久保、宮本、藤沢に1台ずつ4台あるが、祭典時には蔵から五所宮にむかい、五所宮の前に並べた後戻って来るだけで、単に一番近い、通れる道巾の道を通るといっただけである。また並べ方は、半分形、大久保、宮本、藤沢の順だが、これも意味はなく、山車の立派な順、あるいは半分形、大久保の山車は大工が彫ったのに対し、宮本、藤沢のは仏師が彫ったので仏に関する彫物が多いから、という理由とされる。

## 2) 統制の有る事例

〈カミ、シモによる統制〉かつて五所宮は4つの守り神の八幡宮に守られた大きな神社であったから、祭典には現在の中井町の範囲を越えて、多くの部落の人々が集まり、五所宮の北の大大町という地区で、農機具市が開かれたり、芸人達が集まったりして大変大きな祭りであったという。この場合4つの八幡宮から各々御輿がやって来た。この経路は、今日ではよくわからないが、一定の経路で、各部落を特定の順に通ってやって来る事になっていた。休み場も決まっており、秦野の八幡宮の御輿の休み場跡が比奈窪の平台という所にあり、堀八幡宮の休み場跡も同じく比奈窪の御見合場という所に残っている。しかしこの慣行もその後すたれ、例えば赤田八幡宮の御輿は、赤田の人々がかついでくる途中大雨にあい、そのまま放置して帰ってしまったのを半分形の人々が発見し、御輿を粗末にしたという事で言い争いとなり、結局それ以後その御輿は五所宮の所有となり、赤田からかついでこなくなった、という言い伝えがある。もともと五所宮には御輿は2台あり、土肥実平が、4羽あった鶯の舞用の鶯のうち2羽と共に1台を湯河原の五所神社に持って行ってしまい、長年1台しかなかったのが2台になった、という事である。1台だった頃は五所宮周辺を近くの部落の人々がかついでただけだったが、2台になり、祭りが盛大になった寄せ宮の後、当初は赤田も来ていたが、これをはずし、カミ6ヶ村が比奈窪、松本、岩倉と鴨沢、古怒田、雑色にわかれ、1年交代でかついだ。もう1台はシモ6ヶ村が、半分形、大久保と遠藤、北田、久所、藤沢に分かれて1年交代でかついだ。これも場所は五所宮周辺だけである。やがてシモ6ヶ村だけは各部落を回るようになり、この場合の順序は、大久保、半分形、もう1つが遠藤、北田、久所、藤沢の順で、1回りした後五所宮に帰り、今度は御輿を変えて1回りしたのである。その後20数年前のある年、カミ6ヶ村の人々が1台を自分達の部落でもかつぎたいと、車にのせて持って行ってしまおうという出来事があり、以後2台のうち1台をカミ、1台をシモ各6ヶ村がかついで各々の部落を回るようになった。その場合当初は1部落だけを回った為、各部落には6年に1回しか回ってこないという不満が出て、その後は比奈窪、松本、岩倉が共同でかついで3部落をこの順で回り、翌年は鴨沢、古怒田、雑色が共同でこの順で回るという形に

なった。更に最近は、トラックにのせて回る為、カミの2グループに回った後シモの2グループにリレーして回るということも行なわれ、毎年御輿が中村の全部落を特定の順序で回るようになったのである。

以上を要すれば、中井を越えた地域の各部落が御輿のコースにより特定順に結ばれていた状態から、これがなくなり、今度は中村内がカミ6ヶ村、シモ6ヶ村と、カミ、シモに分かれ、更にその6部落が特定の順で結ばれ、更にはカミ、シモ全部落が特定の順で結ばれた、という事になる。

<鬼門による統制>鬼門によって移動が統制されるのは通婚、養子である。この方角とやりとりするとよくない事があるといわれ、避けられる。ただこの範囲は町内位で、今日、圧倒的多数を占める遠方の場合は気にしない。この他方角ではないが、過去において、交通の便が悪かった頃には、出来るならカミ方向の山の中には行きたくないとされ、特に自分の部落が好ましいとされた。即ちこの統制によれば、通婚によるシンセキ関係は、東西方向、それも自分の部落が多くなる、という結果になる。

要するに、各部落を特定の距離関係に順序づける統制が全体としては少ないが、統制がある事例では、その変動が激しいという点が注目される。

### 3. 部落内の移動

部落内での移動が方位によって統制される例が極めて少ないのも1つの特徴である。まず御輿は、部落により2通りで、松本、鴨沢、岩倉の例では、経路はカミからシモへと決まっているが、どの家に寄るかはおかつぎ手が決め、通例祭典役員、区長、議員宅等を回るが、要するに祝儀や酒が出るような家を回るのである。これに対し大久保は、寄る家の選択は同じだが、経路は全く決まっていない。

嫁入行列、兵士の見送りも特定経路はない。墓は古いものは自分の持ち分の山の中にある場合が多く、公道を通るといってもわずかで、経路の指定はない。また新しい墓は寺にある家が多いが、この場合も特定経路はなく、帰りに別の道を通るという事もない。その他排棄物、排水の処理も無統制であり、虫送り、鳥追い等は行なわれない。

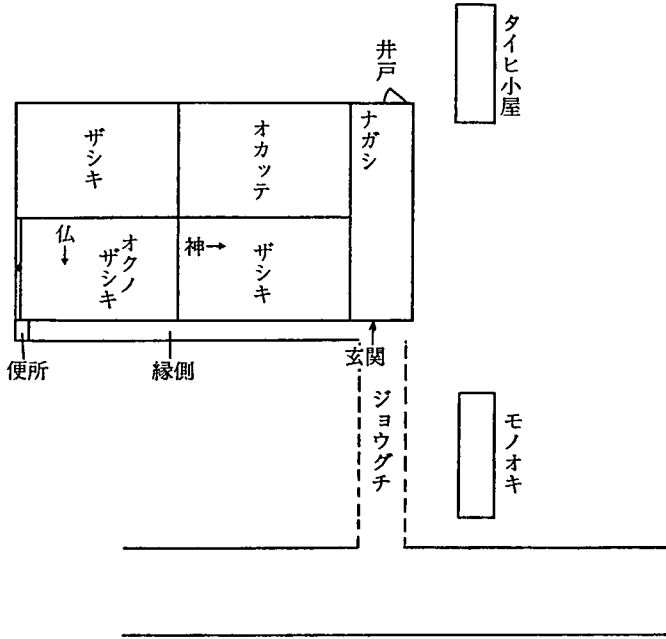
要するに、部落の空間を単位として、その空間内に一次元的序列を設定したり、空間内と外の間の区別を明確化することがない、ということになる。

### 4. 住居内の移動

#### 1) 住居の建て方

北向きは良くないとされ、通例は図3のように、南向き、または南東、南西向きに建てる。カミ、シモとの関連で言えば、多くはシモ向きで裏がカミとなるが、部落レベルのカミ、シモは向きが変化するので、オクノザンキ、ナンド側がカミになる大久保の例もあれば、オカッテ、ザンキ側がカミになる岩倉、松本等の例もある。伝統的間取りは、田の字形で、オクノザンキとナンドの間は壁だが、他はフスマで、取りはずせる。屋敷内では他に物置兼牛馬小屋が土間より右に別棟で建てられ、井戸

図 3



は水脈にもよるが、裏にあるのが好ましいとされた。稲荷も裏で、鬼門を守るという、出入口は数ヶ所あるのが普通だが、この内1つの通路がジョウグチと呼ばれ、門がある家はあまり多くないが、お盆には後述のようにここで先祖を迎え、嫁入行列、葬列もここから出る。葬列の場合はここに竹のアーチを作る。また正月その年初めて外に出るのもここからである。このジョウグチの向きは道の位置により様々で、オクノザシキ側の家もあれば、土間側の家もあり、公道を背にしている家では裏側になる。

## 2) 人々自身の移動

〈寝室の移動〉1世代だけ居住の場合はナンドが寝室である。長男が結婚した場合はオクノザシキに老夫婦、ナンドに若夫婦。3世代ならば上からオクノザシキ、ザシキ、ナンドの順。4世代または子供が成長後等は土間に小さな部屋を作ったりした。

〈接客〉簡単な用事ならば玄関または玄関内の土間、あがる場合はまずザシキである。この座順は、オカッテ側に主人、外側に客人、またはオクノザシキ側に主人、土間側に客人、の2通りがある。更に改まった場合はオクノザシキに通し、座順は同様である。

〈儀礼〉住居内で行なわれた儀礼には結婚式、葬式、ナヅケ、クイズメ等があるが、主にオクノザシキで行われ、足りない場合はザシキも使われた。座順はトコバンシラの前が正座<sup>しょうざ</sup>で、その前の2人が最も上座である。その両隣が2番目で、以下両側共ドマ方向に行くにつれて下座になる。ナンド方と縁側方は差がない。

〈置場〉各人の衣類等持物は各自の寝室のタンス等に入れる。特に統制されるものとしては、その

家の宝物等大切なものはオクノザシキに置く。土産はどこからのものでも一旦仏壇にあげるものだという。

〈室内農作業〉殆んどの家には大きな物置があるので、作業や牛馬等の飼育はそこで行なわれたが、稲、麦の脱穀等で足りない場合は、まずドマに持ち込む。養蚕では過程によって変化し、一部屋で間に合うならザシキだけ、2部屋必要ならオクノザシキまで、そして上蔭期間中はこの2部屋の天井まで使う。決して使われないのはナンドとオカッテである。

〈死者〉人々自身の死後も空間的統制が行なわれる。湯灌は現在は脱脂綿にアルコールを浸してするので残り水は出ないし、脱脂綿は棺に入れてしまうが、かつてはタオルを使って湯で洗ったので、残り水はナンドの畳をあげて床下に捨てた。使ったタオルは乞食にやった。死者はオクノザシキに北まくらに寝かせ、葬式はオクノザシキとザシキで行なわれ、僧は縁側から出入りする。現在は火葬が多いので火葬場に運ぶ事が多いが、かつては土葬だったので野辺送りが行なわれた。棺はザシキから玄関を通して運び出し、庭にロウソクを6本たてて右回りに3回まわる。棺を出した後はオクノザシキとザシキを玄関に向かって掃き出す。

死者の持物は、茶碗、箸は墓においてくる。その他は四十九日の際に形見としてわけ、残りは廃品回収業者や乞食に渡した。布団は薄いものは棺に入れ、厚いものは使った場合もあるが、通例廃品回収業者に引きとってもらった。

〈盆〉盆を迎える準備はまず、「街道から御盆が来る」と言って、迎える為にカンノンサンを作る。これは砂を山形に盛り、周囲に3本竹筒等をたて、金銀の紙製の花を飾る。家によっては、カンノンサンの頂上に向かって細い棒で階段を作り、ジョウグチと呼ぶ。カンノンサンの位置は通例ジョウグチで、左右はかまわない。地区によっては、ジョウグチから公道をへだてた反対側に作る所もある。目の前が川で、橋を渡って入る家は橋の手前（屋敷側）に作る。この砂は川から取るという人もいる。また一部では、同じ部落の本分家で共同でカンノンサンを1つだけ作るという例もあり、その位置は本分家が並ぶ公道の端の地点で、墓地に向かう途中で作るという訳ではない。他方仏壇は、中の位碑を外に出してテーブル等に新しいものを手前にして並べ、ホウズキ、蓮、里芋、茄子、花等を飾る。また墓の清掃も済ませる。

8月13日の夕方には、カンノンサンの所にナス、キュウリで作った牛馬を並べ、迎え火をたく、墓地まで先祖を迎えに行かないのが普通である。先祖は玄関から入って仏壇におり、15日には買物に出かける。16日にも墓地まで送ることはせず、飾ったものは「川に納める」と言って、団子などと共に川に流してしまう。この場合の川というのは、中村川及びその主な支流で、部落内のどこでも橋がある所で流す。その後カンノンサンをこわしてしまおうが、砂は付近にならしておくだけでよい。

〈動物の処理〉牛馬は農耕用、秦野の専売公社への葉煙草運搬用等に盛んに飼育された。最初は馬が中心だったが、大正末に牛が流行し、馬にとってかわったという。馬が死んだ場合は秦野に動物処理専門の人々がおり、その人々に頼んだ。ただ病死の場合は自分で処理せねばならず、屋敷内の目立たない所、特に裏山などに馬頭観音をたてて埋めた。牛は年老いてくると死なないうちに若い牛と交

換するのが一般的だったが、死んだ場合は同じく秦野の人々に引き取ってもらった。犬や猫が死んだ場合は、畑に埋めることが多いが、馬と一緒に馬頭観音に埋める場合もある。

〈給排水処理〉現在は町営水道だが、かつては井戸が裏にあることが多く、そこから勝手口を通してオカッテに桶で運び、カメにためておく、神仏に供える水もここから運ぶ。台所の排水は流しの下に土管を埋め側溝に流す。方角はかまわないし、全戸が井戸または清水からの給水なので、排水が下流で次々別の家で使われるということは全くない。風呂は夏は井戸の近くに持ち出したこともあるが、通常は土間においてあり、井戸から水を運び、汚れた後は台所の水といっしょに流すか、タイヒにかけて肥料にした。

〈ゴミ処理〉台所のゴミは牛馬に与えることが多かったが、掃いたゴミ、農作業で出たゴミ等はタイヒにまぜて肥料にした。タイヒ小屋は、土間の斜め後が多かった。

〈排泄物処理〉便所はオクノザシキの裏側にある場合と、先述のタイヒ小屋にある場合とがあり、いずれも畑のタメに運び、肥料にした。方位でいうと、正反対の2方向にあるという訳である。

〈御札等の処理〉稲荷は先に述べた様に、正月飾り、札等の処分地でもある。

以上を要するに、まず部落レベルでは、部落から外へという統制が全くないこと、部落内でも家々を特定の順序に固定するような移動の統制が、岩倉等我々意識上の混乱のない部落を除いてはないことが注目される。住居レベルでは、住居はドマ、ザシキ、オクノザシキの順に開かれ、他方ザシキ、オクノザシキ側から、オカッテ、ナンド側へも奥が設定されており、距離が、2次元的に測定されている。さらに排棄の統制は全方位に及び、方位を規定されていないジョウグチでの追放が強調される。即ち排棄先は隣接住居の方向や特定方向ということがなく、大きな川に流したり、乞食に与える等「屋敷内から外へ」という1次元的序列を促進しない2進法の距離測定が行なわれている。さらに盆や稲荷の例では、同じ部落の家が共同で先祖迎え、排棄を行なう例も、同じ部落の本分家を二進法でゼロとする例と考えるとよい。

#### IV 結 論

中井の人々の我々意識の特徴は、変動が激しく、その結果大久保のようにもともとの部落の我々意識と、新たに空間的近さによって作り出された我々意識との重層性が見られる、という点であった。

通例部落なり、ある地域の我々意識上の連帯は空間的隔りの小さい事によって相当程度は自動的に明示、固定される。更には、空間を何らかの手段で切り取り、境界を設定することにより境界の内側の物理的距離はノーカウントとされ、外側との間には大きな距離が設定され、内側の人々の我々意識上の連帯が明示、固定され、他方外側の人々との隔りが明示、固定される。ところが大久保のような場合、あるいは中井全体としても、変動が激しかった場合、これは殆んど機能しないことになる。大久保の如く、空間的な集落と、社会的な部落が全く一致しないのであるから、部落境など明示した所で何の役にも立たない。新たな我々意識とは一致するとしても、旧来の我々意識とは相矛盾してしまう。

無論地名もあまり機能しない。地名はある特定の範囲の空間のもつ物理的距離をノーカウントとするための手段である。即ち同じ単一の地名を与える事で、物理的には存在する距離を解消してしまう。逆に空間Aと空間Bに別の地名を与えることによって空間Aと空間Bの間では現実に存在する以上の大きな物理的距離がカウントされることになる。0か1かという2進法の空間区分が設定され、0に住む人々と1に住む人々との間に我々意識上の明確な区分が設定、明示されることになる。これは例えば、中井という地名が、まず周辺の市町との分離を明示し、更に内部では中村という次のレベルの名称が、井の口との区分を明示する、地名が機能するのはここまでである。もちろん松本、岩倉等の場合は、次の部落レベルでも機能する。しかし大久保では確かに地番は、遠藤は遠藤、田中は田中、北田は北田となっているが、飛地が多数を占め、1部落の我々意識を明示、固定するには殆んど役に立たない。逆に空間的近さの作り出した新たな我々意識上の近さとは矛盾する。

そこで注目したのが方位及びそれによる人、物の空間的移動に対する統制であった。まずはカミ、シモの設定と我々意識との関係を見ると、この設定と我々意識上の連帯とが一致し、逆に設定しない事が、我々意識上連帯のないことと一致していることに気がつく。即ち、かつて中井という我々意識の単位が存在しなかった時代、カミ、シモが設定されていたのは、五所宮の祭典や、多様な経済的つながりによって結びつけられた地域であった。次に中井村が成立し、周辺他市町との区分、明示が必要となり、また井の口との関係により、中村の我々意識の明示、固定が必要となった時代には、かつて広く設定されていたカミ、シモはなくなり、五所宮の御輿を直接の契機として、中村内がカミ、シモに2分された。部落レベルでも、松本、岩倉等我々意識の変動、重層性のない所ではもともと部落内に1次元のかつ中村レベルのカミ、シモとは必ずしも一致しない独自のカミ、シモが設定されていたのに対し、大久保では、田中部落であった時代には設定されていたカミ、シモが、一旦姿を消し、移住がはじまって何世代もたち、物理的近さによる我々意識上の近さが出来てくるにつれて、再度カミ、シモが設定されて来ているのである。

カミ、シモといった方位で或る地域を呼んだ場合、そもそも測定の基準点があり、空間的距離を測定していくことによって、はじめてカミなりシモなりと呼ぶことができる筈である。即ち基準点となる地域内部では物理的距離をノーカウントとし、呼んだ先の地域との間の距離はカウントし、この間に区分が設定されることとなる。これがそのまま我々意識上の区分、連帯と一致しているという訳で、例えばカミ6ヶ村、シモ6ヶ村の設定が、中井の成立と井の口との対抗による中村の連帯が必要とされ、更に祭典によるカミ6ヶ村、シモ6ヶ村の我々意識上の近さが成立した時期であった、ということになる。

他方、この方位による人や物の空間的移動の統制を見ると、これもまた我々意識の変動、重層性と一致していることがわかる。まずは五所宮で五社共同の祭典が行なわれていた時代の御輿の経路である。この経路はカミ、シモの設定された地域の各部落を特定の順序関係に固定するが、この各部落というのが祭典によって結びつけられた地域であった。やがてこうした祭典がなくなり、御輿も五所宮周辺を回るだけとなったが、しかしその後、カミ6ヶ村、シモ6ヶ村が、かつぐ場所こそ五所宮周辺

だが、順序を決めて、かつぐようになったのは、寄せ宮と中井村成立による、中井及び中村という我々意識の単位が出来、これを明示、固定する必要の出た時代であった。更に御輿はこの後、シモ6ヶ村を特定の順序で回るようになり、更にはカミ6ヶ村もまた特定の順で回るようになったのは、中井の歴史も長くなり、発展の差等による井の口との対抗が一層明確になった時代である。

部落内の統制は、全体に少なく、例外が分家を出す場合と、一部の部落における御輿であった。分家の場合、特定の方向への物理的距離が測定されたが、分家は我々意識上最も近く、ジエンにもなりうる、最も我々意識上の近さを明示、固定すべき相手である。また御輿の経路が、1次元的なカミ、シモで統制されたのは松本、岩倉等であるが、これらは我々意識上の変動、重層性のない部落である。これに対し変動、重層性の激しい大久保では、我々意識上の連帯が形成されるに伴って、部落内を回るようにはなったが、特定経路で1次元的測定はまだなされていなかった。また部落境が統制によって強調され、そこで物理的距離の測定が行なわれるという事例がないことも注目された。

住居空間における統制は、全方位に行なわれ、屋敷内と外との区分、即ち物理的距離の2進法的測定が強調された。これを特定方向に統制すると、部落内の1次元的序列設定を促進してしまうことになるはずであるが、その部落空間は、我々意識上混乱した、重層性を持っている訳で、促進することは不都合なはずである。さらに乞食や秦野の人々に引きとらせる。といった事例からは、屋敷の次は部落でなく、部落を無視して、直接、「遠く」へと統制が行なわれることがわかり、部落空間への序列設定が、ここでも回避されている訳である。

要するに中井における方位による人、物の移動の統制は、まず変化が激しく、様々であるということ自体が、多様な変動によって、空間的区分、距離と一致しない重層的我々意識が形成されてしまった地域の、我々意識の実情と対応している、ということになる。

他方で、変化する統制は、御輿の事例でもわかるように、逆に変動による新しい方の我々意識と一致している訳で、この、祭りの御輿といはなはだ目立つ物の移動により、特定の順に測定される物理的距離は、そのまま我々意識、特に変動による新たな我々意識の明示、固定という機能を与えられている、と考えることができる。

さらにこれは、物理的距離を測定していくこと自体が、我々意識上の連帯を必要とする場合に行なわれるということで、物理的空間の区分や、そのままでも存在する物理的隔りによって半ば自動的に行われる我々意識の明示、固定が機能しなくなった中井においては、むしろ逆に、物理的距離を作り出すことによって、明示、固定が行なわれている、という点に注目しなければならない。

## 註

- 1) 斗鬼正一 1978 「道路の物質文化論——新潟県津南町見玉のホンドウリを事例として——」『明治大学大学院紀要』第16集  
斗鬼正一 1980 「道の物質文化論Ⅱ——新潟県津南町見玉に於ける物質文化の導入、配置、排棄を事例として——」『明治大学大学院紀要』第17集  
斗鬼正一 1981 「道の物質文化論Ⅲ——新潟県津南町見玉に於ける道案内を事例として——」『明治大学大学院紀要』第18集



斗鬼正一 1982 「道と空間的、社会的定位——ユキミチを事例として——」『明治大学大学院紀要』第19集

斗鬼正一 1983 「方位と我々意識」『明治大学大学院紀要』第20集

2) 中井村誌編集委員会 1958 『中井村誌』

#### 参考資料、文献

中井町役場 『広報なかい』第157号、第160号、第178号

中井町役場 『中井町土地宝典』

中井町役場 1983 『中井町制施行25年記念要覧』